

8 2 《聖マタイの召命》と《聖マタイの殉教》

視覚誘導補助線としての剣

双方の剣は、物語の重要モチーフだった

2024

真鍋友範



《聖マタイの召命》



《聖マタイの殉教》

- * 両作品には、剣が重要なモチーフとして登場する。
- * 恐らくマタイのモデル役は違うが、同年配の人物配役となっている。

1 描かれた剣の持つ意味

17世紀初頭のローマは、教皇を立てる上で、フランス派・フィレンツェのメディチ家の枢機卿グループとスペイン派枢機卿グループとの勢力争いがあった時代であった。

カラヴァッジョは、敵対するスペイン派勢力とのトラブルを引き起こしていたから、身を守る必要があったのだろう。

カラヴァッジョは、メディチ家のデル・モンテ枢機卿のいたローマにおいても数々の傷害事件などのトラブルを起こしたことが、ローマに残された逮捕資料で知られている。

このような状況下、双方の作品で、【剣は、対となる重要なモチーフ】になっている。

では、具体的に剣はどのような役割になっているかを見てみよう。

2 《聖マタイの召命》の剣



よく見ると、剣の軸線を上方に延長すると、その線は眼鏡の収税人の頭頂部の点光に向かっていることが分かる。

この表現内容は偶然なのだろうか。それとも計算された角度であるにもかかわらず、偶然を装っているのか。

カラヴァッジョの剣を大切にした日常性を考慮すると、彼が、【絵画内容に関わる重要アイテムとして剣を扱った】、と考えられるのが自然だ。

その重要な役割とは、剣を配置することによって、マタイの存在位置を強調する視線誘導の補助線的役割であったのだ。

同時に、その補助線とは、眼鏡の収税史の頭頂部への、父なる神からの導きの光点を強調する視線誘導補助線でもあったのだ。

3 《聖マタイの殉教》の剣



《聖マタイの殉教》1599—1600カラヴァッジョ

この《聖マタイの殉者》は、《聖マタイの召命》と対をなす作品として有名だ。

主役より脇役が目立つ作品であるところが、カラヴァッジョらしい特徴だ。

この2枚は、当時同時に注文されている。当然2枚には表現上の関連性がある。

この作品では、マタイの殉教シーンが描かれている。刺客の姿が腰巻だけなのは、暗殺者である刺客が直前の洗礼式に参加していた被洗礼者の一人であった為だ。

暗殺者は、左手でマタイの手首を持ち、マタイの動きを制しつつ、右手の剣をまさに振り上げようとしている姿だ。

周囲の参列者、被洗礼者は驚いて腰を抜かす者もいる。少し後方には、いち早く逃げつつも、現場の様子を窺っている人物がいる。この人物の役割は、参列者のふりをして、洗礼式開始直後に剣をこの暗殺者に奪われる役割であったと考えられる。一説によると、カラヴァッジョ自身が描かれているという。

このストーリーの流れから、この剣は、カラヴァッジョ自身が持っていた剣を、重要な暗殺アイテムとして、この洗礼者に紛れ込んでいた暗殺者役のモデルに持たせたもの、と考えられるだろう。

4 剣の持つ対の意味

2枚の作品の共通点が、双方ともに剣が登場することは、見ての通りだが、それ以上の驚愕の一致点がある。

それは、どちらも結果的に【マタイへの視覚誘導補助線】となっていることだ。

もっと驚くべき表現上の特徴とは、【召命の瞬間には、剣の上側にいたマタイだが、殉教のシーンでのマタイは、剣の下側に配置されている。】

カラヴァッジョは、【対となるように、それぞれの作品で、剣の上下位置にマタイを配置している】のだ。

この事実は、カラヴァッジョが2作品に於いて、連作としての関連性を、如何に真剣に構図研究したのか、その才能を物語る決定的証拠でもあるのだ。

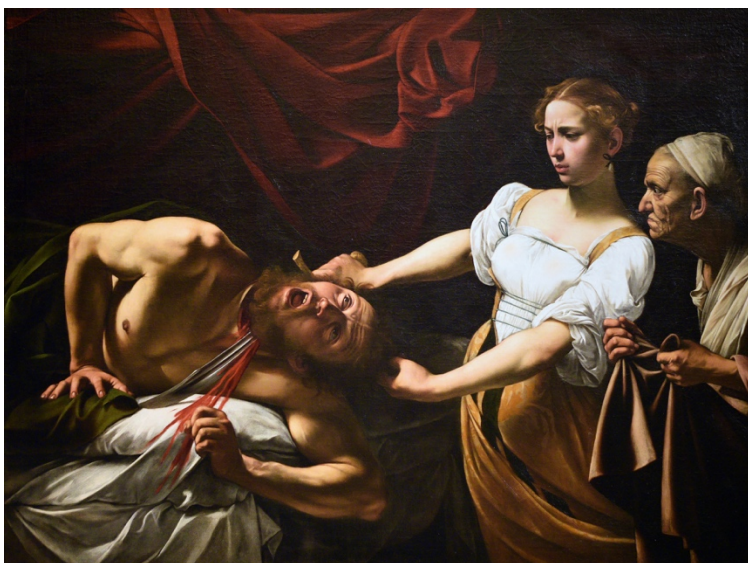
カラヴァッジョは天才的画才を持つ、バロック絵画の大家であったのだ。

5 剣は、物語の陰の主役だった

こうして見ると、カラヴァッジョという画家は、とても剣を大切にしていたようだ。

なぜなら、絵画モチーフとしては地味ながらも、重要なモチーフとして扱われているからだ。

そうだ。カラヴァッジョ作品での剣の登場場面は多い。



《ホロフェルネスの首を斬るユディト》 1598-99または1602



《洗礼者聖ヨハネの斬首》 1608

カラヴァッジョは、剣を愛した画家であったのだろう。何度も繰り返して自分の作品に剣を描きこんでいる。時に重要な主役級モチーフとして。